



明治学院大学機関リポジトリ
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	【PRIME公開研究会の記録】 まえがき / 韓国における朝鮮近現代史研究の現状と課題 社会主義運動研究を中心に / 討論者コメント / 討論者への応答
Author(s)	鄭, 栄桓; 林, 京錫; 井上, 學
Citation	PRIME = プライム, 40: 109-130
Issue Date	2017-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10723/3058
Rights	

PRIME 研究会

「韓国における朝鮮近現代史研究の現状と課題：社会主義運動研究を中心に」の記録

鄭 榮 桓
(PRIME 主任)

以下に掲載する林京錫^{イムギョンソク}氏の報告と井上學氏のコメント、そして林氏のリプライは、PRIME主催公開研究会として2016年10月23日に開催された「韓国における朝鮮近現代史研究の現状と課題：社会主義運動研究を中心に」の記録である。

報告者の林京錫氏（成均館大学校文科大学史学科教授）は、日本、韓国のみならず旧ソ連の史料の発掘を通して植民地期から解放後にかけての朝鮮社会主義運動の実像を明らかにしてきた、韓国における現代史研究の第一人者である。『韓国社会主義の起源』（歴史批評社、2003年）、『忘れがたい革命家についての記録』（歴史批評社、2008年）、『モスクワ密使 朝鮮共産党のコミンテルン加入外交（1925～1926年）』（プルンヨクサ、2012年）、『而丁朴憲永一代記』（歴史批評社）などの著書のほか、『而丁朴憲永全集』（全九巻、歴史批評社）の編纂者でもある。掲載した報告は、これまでの研究をふまえて、韓国における社会主義運動史研究の現状と課題をまとめたものである。

コメントーターの井上學氏（雑誌『海峡』同人）は、1920～30年代の日本反帝同盟の活動の発掘に務め、2008年には研究の集大成として『日本反帝同盟史研究 戦前期反戦・反帝運動の軌跡』（不二出版、2008年）をまとめたほか、『朝鮮戦争下公安関係資料—光永源植資料』（全四巻、不

二出版、2011年）の編纂や、金炅一『李載裕とその時代——一九三〇年代ソウルの革命的労働運動』の翻訳（同時代社、元吉宏氏との共訳）を手がけてきた。近年は戦後日本の共産主義運動と在日朝鮮人運動について雑誌『海峡』に研究を発表しており、林氏の報告へのコメントは、これらの長年にわたる井上氏の研究に基づいたものである。

当時の研究会は会場からも活発な質問とコメントがなされたが、残念ながら紙幅の都合上割愛せざるをえなかった。

なお、本研究会はPRIMEの研究プロジェクト「強制連行の「戦後」史：東アジアの「和解」に向けて」の一環として開催された。

追記

昨年12月、本公開研究会でコメントーターを務められた井上學氏が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

韓国における朝鮮近現代史研究の現状と課題：社会主義運動研究を中心に

林 京 錫

(成均館大学校文科大学史学科教授)

訳：鄭 榮 桓

(PRIME 主任)

1. 冷戦の所産

韓国社会主義運動史研究をはじめて学問の軌道に乗せた者たちがいる。徐大肅、金俊燁、金昌順、ロバート・スカラピーノ、李庭植といった人々である。韓国と米国の制度圏アカデミズムに基盤を置く研究者たちであった。彼らは1960~70年代に韓国社会主義に関する注目すべき研究成果を発表した。

Dae-Sook Suh, *The Korean Communist Movement: 1918-1948*, Princeton University Press, 1967; 徐大肅 著, 金進 譯, 『朝鮮共產主義運動史』, 東京, コリア評論社, 1970; 서대숙 지음, 현대사연구회 옮김, 『한국공산주의운동사 연구』, 화다, 1985

김준엽·김창순, 『한국공산주의운동사』 1-5, 고려대 아세아문제연구소, 1967-1976; 청계연구소, 1986 재간행 [金俊燁·金昌順 『韓国共產主義運動史』 1-5, 高麗大学校亜細亜問題研究所, 1967-1976; 清溪研究所, 1986再刊]

Robert A. Scalapino & Chong-Sik Lee, *Communism in Korea, Part 1: The Movement*, University of California Press, 1972; 로버트 스칼라피노, 이정식 지음, 한홍구 옮김, 『한국공산주의운동사 (1-3)』, 돌베개,

1986 [ロバート・スカラピーノ、李庭植著、韓洪九訳『韓国共產主義運動史 (1-3)』、トルベゲ、1986年] ; 로버트 스칼라피노, 이정식 지음, 한홍구 옮김, 『(합본개정판) 한국공산주의운동사』, 돌베개, 2015

これらの著述は、研究史上消し難い価値を有している。第一に、それらは分厚い実証研究の所産であった。日本の政府機関が編纂した各種の記録と運動参加者たちの証言など、膨大な資料を発掘し、その実証的土台のもとに歴史像を構成した。千篇一律の反共宣伝用著作には見出し得ない態度であった。

そのころの韓国では「金日成にせ者説」が不動の真実とみなされていた。公式的な論議においてはそうであった。日帝 [日本帝国主義：訳者注、以下同じ] 下の抗日武装闘争参加者と解放後の朝鮮民主主義人民共和国の執権者は異なる人物だという主張だった。この主張に異議を提起することは、反共を国是とし国家保安法が厳然と存在した当時の条件のもとでは危険なことであった。そうした時代に、金俊燁、金昌順とスカラピーノ、李庭植の著作は真実を伝える役割を果たした。これらの著作は解放前と後の金日成が同一人物であることを示す資料を幅広く引用していた。その実証性ゆえに当時としては見出し難い客観性を堅持す

ることができ、社会主義に関する学問的論議の場を切り拓くことができた。

第二に、朝鮮における社会主義運動史の鳥瞰図を描いた。社会主義の水脈がどこに源を発するのか、どこを経てどこへ流れていこうとするのかを巨視的に眺望した。金俊燁と金昌順は日帝下社会主義運動史の全体像を描き出し、徐大肅はそれに加えて北朝鮮政権の樹立までを扱った。スカラピーノと李庭植の本は100年に至る社会主義の歴史の総体を対象とした。彼らが描いた鳥瞰図の具体像については賛成・反対の議論の余地があるが、社会主義運動研究史における開拓的な役割を遂行したことには異論がないであろう。

しかしこれらの著作には少なからず問題があった。何よりもまず指摘すべきことは、イデオロギー的な先入観から自由でなかったことである。彼らが社会主義研究に着手したのは1950年代であった。李庭植は1957年から、金俊燁と金昌順は1962年から研究に着手したという。6.25戦争〔朝鮮戦争〕を経た後の、イデオロギー的な敵対性が高まっていた時期であった。これらの研究者たちは当時のイデオロギー的、政治的な環境から独立しえなかった。誰であれ敵対的な観点から社会主義を観察していた。例えば韓国政府機関の支援のもとに研究を進めた金俊燁と金昌順がそうであった。彼らは独立運動陣営内で社会主義の潮流が形成された事実をもって「民族独立運動に残酷な混乱が惹起」されたと説明した⁽¹⁾。米国のフォード財団とロックフェラー財団などの支援のもと研究を進めたスカラピーノと李庭植は、「解放以前の共産主義運動が失敗することになった根本原因は何であったか？」という問いを立て⁽²⁾、徐大肅も「土着共産主義者たちの失敗」の原因を分析することを自身の研究目的に据えた⁽³⁾。

方法のうえでも脆弱性を抱えていた。彼らは社会主義者たちの行動と思惟に内在する内面的な契機をなおざりにした。過小評価したともいえる。

こうした弱さは変化の内的原因についての探求を困難にした。社会主義運動史にあらわれる変化の原因を、単に外部にのみ求めるほかなかった。例えば、朝鮮人社会主義者たちはロシアのボルシェヴィキとコミンテルンに一方的に利用される受動的な存在として描写されがちであった。金俊燁と金昌順は「初期共産主義運動は朝鮮革命に関する確固たる思想体系や理論の展開なしに、ボルシェヴィキの当面の目標のため利用」されたと理解した⁽⁴⁾。

ふりかえると、これらの問題点はこのときはじめて登場したわけではない。1960-70年代の韓国と米国の学界にあらわれた反共主義的な歴史叙述に根があった。さらには日帝植民地時代に朝鮮社会主義運動を取り締まるために活動した思想検事たちの視角がまさにそうであった。例えば思想検事制度がはじめて導入された1927年にその職に就いた伊藤憲郎は、朝鮮社会主義運動に関する反共主義的研究の開拓者といっても何ら遜色がない。伊藤の見解に従えば、朝鮮人社会主義者たちには主体性が欠如しており、コミンテルンと日本共産党の影響下で動かされる隷属的な存在であった。また、何らの論理的な動機もなしに分裂に分裂を重ねる存在であった。〔伊藤によれば〕派閥争いは朝鮮人社会主義者たちの属性であった。のみならず朝鮮人に普遍的にみられる天賦の民族性の結果であるかのごとく描かれた⁽⁵⁾。

2. 民主化運動の産物

1970-80年代には民主革命の熱気が高まった。この熱気は結果的に軍事独裁政権を退陣させた。のみならず学問研究のイデオロギー的な制約とタブーを後退させた。社会主義運動史研究にも、その現象ははっきりとあらわれた。民主化運動に共感する進歩的な少壮研究者と学術運動が登場した。1980年代中盤から約10年のあいだ、それまで

の社会主義運動研究とは性格を異にする一連の研究成果が刊行された。

임영태, 『식민지시대 한국 사회와 운동 [植民地時代の韓国社会と運動]』, 사계절, 1985.

역사문제연구소 민족해방운동사연구반, 『쟁점과 과제, 민족해방운동사 [争点と課題、民族解放運動史]』, 역사비평사, 1990.

한국역사연구회 1930년대연구반, 『일제하 사회주의운동사 [日帝下社会主義運動史]』, 한길사, 1991.

지수걸, 『일제하 농민조합운동연구 [日帝下農民組合運動研究]』, 역사비평사, 1993.

이준식, 『농촌사회변동과 농민운동; 일제침략기 함경남도의 경우 [農村社会變動と農民運動; 日帝侵略期咸鏡南道の場合]』, 민영사, 1993.

김경일, 『이재유 연구 [李載裕研究]』, 창작과비평사, 1993.

역사문제연구소, 『한국 근현대 지역운동사 [韓國近現代地域運動史] (1,2)』, 역사비평사, 1993.

이균영, 『신간회연구 [新幹会研究]』, 역사비평사, 1994.

한국역사연구회 근현대청년운동사연구반, 『한국근현대청년운동사 [韓國近現代青年運動史]』, 풀빛, 1995.

강만길, 성대경 엮음, 『한국사회주의운동인명사전 [韓國社会主義運動人名事典]』, 창작과비평사, 1996.

역사학연구소 편, 『한국공산주의운동사 연구: 현황과 전망 [韓國共產主義運動史研究: 現況と展望]』, 아세아문화사, 1997.

これらの本を執筆した人々は、学術運動に参加した歴史三団体に結集した研究者であった。歴史三団体とは、韓国歴史研究会、歴史問題研究所、歴史学研究所を指す。これらの団体に、指導教授

との不和が生じるかもしれない危険を乗り越えて、各大学の修士・博士課程の大学院生たちが集まった。学生運動出身者であったり、彼らと思想的、情緒的な一体感をもつ少壮研究者グループであった。

三つの研究団体に分かれたのは理由があった。団体ごとに性格が異なったためである。韓国歴史研究会は進歩的な歴史研究者たちの大衆団体を自任した。民主化と統一という社会的要請を自らの研究と結合させるために努力する、あらゆる歴史研究者の結束を目標とした。これに対し歴史問題研究所は歴史学と市民社会の疎通に主眼をおいた。『歴史批評』という歴史大衆誌を刊行し、大衆向けの講演に力を注いだ。歴史学研究所は九老歴史研究所という初期の名称にもうかがえるように、歴史学と労働者大衆との疎通を重視した[1985年のソウル・九老工業団地の大規模な同盟ストライキを多くの労働者や市民たちが支援したことから、当時「九老」は労働者の連帯と闘争、民主化運動を象徴する地名だった。]。1987年7-9月の労働者大闘争以後に活性化した労働組合運動に歩調を合わせ、労働者教育のため努力していた。

この10年あまりの時期には、社会主義運動史は歴史研究者からもっとも脚光を浴びた研究分野であった。韓国歴史研究会の母体のひとつ、韓国近代史研究会がはじめて発足したときのことであった。研究会内部に四つの分科が設立された。経済史分科、社会史分科、政治史分科、運動史分科の四つであった。どの分科にも新進気鋭の少壮研究者たちが集まったが、なかでも特に運動史分科にはラディカルで弁の立つ者たちが多かった。社会史と政治史の分科には主として朝鮮王朝[李朝]時代後期の歴史を専攻する者が多く、経済史と運動史分科には日帝時代を専攻する研究者たちが集まった。何か基準があつてそうになったわけではなく、自然にそのように分かれて

いった。

運動史と経済史はともに歴史研究者たちが好んで選んだ二大研究分野であった。道徳的熱情に満ちあふれた若き研究者たちは、社会構成体の継起的な発展過程に内在する合法性を客観的に研究することに深く魅せられた。また、人間解放の条件を創出しようという能動的な実践を具体的に研究することにも使命感を抱いた。両者は本質的に同一のものとなされた。経済史と運動史の境界を越えて往来することは、あまりに自然なことであった。

そのころ運動史研究に身を投じた研究者たちは、革命を不穏視する既存の歴史像と対決することを自らの課題とみなした。それまでの研究成果が、社会主義運動史をぼろぼろでみすぼらしい奇形的なイメージへと形象化したことを批判した。反共を国是とする国家機関の支援を受けたり、米国の金融資本の研究費を得て生産された既存の歴史像は、歴史的真相を誤導していると判断した。膨大な史料を駆使した基盤のうえに開拓的な研究成果を残したことについては、歴史研究に従事する同業者として敬意を抱きはするが、彼らが描き出した公正さと合理性を欠く歴史像に対しては嫌悪感を表明した。

この時期の社会主義研究は研究者たちの共同研究を通じて前進した。韓国歴史研究会の内部に設立された社会主義運動史研究班がその代表的な例だ。この研究班は1989年から約10年のあいだ活動した。その成果は共同研究の発表会の形式で報告された。『歴史と現実』11号（1994年3月）に載った「世界大恐慌期の民族解放運動」⁽⁶⁾、28号（1998年6月）に載った「共産主義グループと党統一運動」などがそれである⁽⁷⁾。共同研究の成果は単行本でも出版された。『日帝下社会主義運動史』（1991年）、『韓国近現代青年運動史』（1995年）などである。のみならずこの共同研究チームに加わった池秀傑、李ジュンシク、林京

錫、田上叔、朴哲河、カン・ホチュル、朴鐘隣らは社会主義に関する研究成果を博士学位論文として提出した⁽⁸⁾。

歴史問題研究所民族解放運動史研究班は1989年に結成された。この研究者グループも社会主義運動に主な力を注いだ。『争点と課題、民族解放運動史』（1990年）は、その共同研究の成果であった。歴史学研究所は1995-1996年に一連の「共産主義運動史ワークショップ」を進めた。その結果として『韓国共産主義運動史研究：現況と展望』（1997年）を刊行した。このワークショップに参加した学者たちにも、社会主義研究に関する論文で博士学位を取った人々がいた。崔ギュジン、全明赫、安泰貞らである⁽⁹⁾。

これら二冊の著作は、共同で研究史の動向を点検した本である。前者は学術運動初期の研究動向を、後者は学術運動全盛期の研究動向を反映している。両者を比較すると、民主化運動の高まりに歩調を揃えて社会主義研究熱がどのように発展してきたかを一望することができる。

少壮研究者たちは史料に密着した研究を志向した。史料にこだわることは運動史研究者にだけ求められる徳目ではないだろうが、冷戦のイデオロギー的な束縛から解放された歴史像を獲得するためには、とりわけそうしなければならなかった。共同研究の構成員たちは社会主義運動に関係する史料を発掘し、それを互いに回覧することに力を注いだ。この時期には多くの史料集が影印本の形態で刊行された。そこには研究者らが様々な経路で獲得した資料も含まれていた⁽¹⁰⁾。

共同研究の気風は研究者たちの技量をより早いスピードで向上させた。その結果、多様な主題にわたり一連の研究成果が生み出された。高麗共産党、朝鮮共産党、新幹会、共産党再建運動、赤色労働組合、赤色農民組合、共産青年会、抗日武装闘争のような社会主義研究にとって不可欠な、主要な対象を扱った分厚い単行本が積み上げられて

いった。

この時期に発表された社会主義研究の成果にも弱点はあった。そのうちの筆頭にあげられるのが「常套性」であったと考えられる。いつからか運動史関係の叙述は、千篇一律のごとき構成と様式に閉じ込められるようになった。例えば「三路」という言葉が運動史研究者たちのあいだで流行したことがある。政治路線、組織路線、闘争路線がそれである。ある団体や人物を研究対象として設定した研究者は、まずその対象の形成の経緯を説明したのち、「三路」の特性を提示することを常とした。

各地方の運動事例を研究する場合にも、同様に常套的な叙述様式が繰り返された。前半では該当地域の経済的・社会的背景を提示し、後半では時間的な順序にしたがい運動に関連する事件を羅列する。事実関係を無味乾燥に羅列したり、よくわからない人々の名前を長く列挙することもある。こうした常套的な歴史叙述は読者たちに何らの魅力も感じさせなかった。感慨を抱かせたり興味を惹くことなどは望むべくもないことであった。

もうひとつの弱さは政治の過剰から生じた。研究者たちは過去の運動の経験を評価しようとした。甚だしくは研究の目的を左右偏向の可否を判定することに置く場合もあった。正しい路線とは何だったのかにこだわるのが、運動史研究の目標であるかのように考えられた。もちろん、当時にも政治の過剰を警戒する声はあった。韓国歴史研究会の社会主義運動史研究班内でもそれに関する議論があった。共同で結論を下しはしなかったが、そのとき以降、運動史の論文の結論を「成果と限界」と整理する研究者が増えた。左右の偏向を問うよりもはるかに柔軟だが、いまからみれば五十歩百歩に思える。その時期には、政治の過剰現象は党派性や実践性の名のもとに正当とみなされた。そのため、書き手と政治的な見解を同じくする者たちだけが、運動史の論文や著作を読み解

くことができた。広範な読者層と疎通しようという問題意識は、そこまで強くなかったものと判断できる。

3. 1991年の影響

十分な収穫をえる前に、社会主義運動は壁にぶつかつた。1989-91年の情勢転換は社会主義運動史研究の前途に難関をつくりだした。運動史研究の活力は目に見えて弱まった。いや、弱まったというよりは致命的な打撃を被ったという表現がより適切であろう。

社会主義圏崩壊という激変期を背景に二人の男女の生きざまと愛を描いた黄哲暎の小説に、『懐かしの庭』がある。女の主人公・韓ユニはこう語る。

1989年を起点に世界史の反動が始まりました。お父さんとあなたが夢見て、私が心の底から賛同した私たちの願いは、もはや全世界的にはじめから再びはじめなければならない出発点に戻ってきたのです⁽¹¹⁾。

小説の女主人公はベルリンの壁が倒れた1989年11月9日以降の世の中を見つめながら、こう吐露する。「お父さん」とはパルチザン出身の元共産党員である。6.25戦争を幸いにも生き延びたが廃人になってしまった自らの父である。「あなた」とは男の主人公、呉ヒョヌのことである。呉は全斗煥政権に立ち向かい地下活動に従事したが、逮捕されて無期懲役刑をうけた新世代の運動家であった。指名手配をうけて逃亡中であった呉は、女主人公の韓ユニとともにカルメという田舎の隠れ家で愛を分け合った。

韓ユニの言葉どおり、その時を起点に世界史の反動が到来した。東欧とソ連の社会主義体制が崩壊した。植民地時代の社会主義者たちと解放後

の山の人々〔山に籠もったバルチザンたちのこと〕、そして軍事独裁政権時代の青年たちが心の底から夢見た願いが崩れ落ちた。信念の廃墟のなかから、人々はそれぞれの行動の様相をみせる。一身の安危と安楽な未来を顧みず、自らの身を投じて正義を追求した数多くの現場の活動家たちが、一人二人とその場を離れた。それぞれが固守してきた塹壕から離脱したわけだ。多くの人々が庶民の日常へとふたたび戻り、年齢を重ね始めた。ある者は数年間司法試験の勉強に打ち込んで弁護士となり、ある者は日常の現実に対応できないまま廃人となった。

一群の人々は自発的な転向を選択した。ソウル労働運動連合のスター・金文洙と全国民主民族運動連合の統一委員長・李在五は、それまで掲げていた民衆の旗を捨て、彼らが立ち向かい戦った相手側の旗を守るようになった。大衆路線と品性の陶冶を訓戒した鋼鉄の金永煥は、反共闘争の理論家になった。経済史学者の安秉直とその弟子たちは政治経済学を捨て、近代化至上主義者へと変身した。いや、さらに進んで韓国の歴史に根深い「洪茶丘主義」陣営の理論的首長になった⁽¹²⁾。

韓ユニの独白は注目に値する。彼女は再び始めねばならないという自覚に到達した。いまや世界的にはじめからやりなおさねばならない出発点に戻ってきたと認識した。彼女の態度は上のような人々とは違う。「離脱」や「転向」の代わりに、「新たな出発」を選んだ。いったいその内面にあるいかなる力が、彼女に廃墟から再び身を起こさせたのであろうか。

1989-91年の転換は歴史学全般に影響を及ぼした。少壮研究者たちが共有していたパラダイムは全般的に崩れてしまった。社会構成体の継起的発展に対する信頼が崩れることで、若い人文学徒たちを魅了した社会構成体論争はもはや議論されなくなった。内在的発展論の問題意識も輝きを失い、それに代わって植民地近代化論が氣勢を揚げ

るようになった。民衆史学論に対する嘲笑と攻撃がそこかしこで強まった。

その代わりに、新しい研究傾向が台頭した。ポスト・モダニズムやポスト・ナショナリズムを標榜する新たな歴史学の旗が、若い研究者たちを惹きつけた。支配と抵抗を近代の双生児として同等視するポスト歴史学の問題意識は、多くの読者と聴衆を獲得した。革命と反革命を同一視する奇妙な見方が公然とあらわれるようになった。抑圧民族と被抑圧民族を分けないまま、あらゆる民族主義を同一視する歴史叙述が流行しはじめた。

極右的な歴史観が勢力を拡張しはじめた。解放前後史に対する右傾化が試みられ、分断体制下の韓国の正統性と優位性を主張する研究の傾向が台頭した。李承晩と朴正熙に対する肯定的再評価を企てる研究者集団が形成された。ついにはニューライト歴史学の潮流がはっきりとその姿をあらわした。彼らはいま歴史教科書を国定化しようと試みており、〔1948年の〕8月15日を建国説と命名するためにあらゆる力を注いでいる。

社会主義運動史研究は退潮した。運動史研究に臨む研究者の数が減少した。社会主義研究を専攻分野とした研究者のなかでも、研究対象を変える人々がどんどん増えていった。関心の移り変わりは非難されるべきことではないだろう。研究者の内面が成熟する過程で人間に対する関心が多様化するのとは自然なことだ。ただ、こうした現象が私的な次元ではなく、社会的な次元で進んだことに注目しなければならない。それに従事するのだと決心する後輩の研究者たちの参入も、ほとんど途切れてしまった。さらには独立運動史中心の剥製化された研究成果が量産される現実も、運動史研究の衰退を加速させている。

運動史研究を貶める現象もあらわれた。安秉直は朝鮮史研究者たちを叱咤した。いまだに独立運動史や民衆運動史にこだわっているのか、と。彼は、韓国近現代史は民衆運動史を中心に叙述され

てはならず、現存する国家の正統性を支えるような方式へと書き直されねばならないと主張する。その後ろを、安の弟子たちが列をなして付き従っている。

4. 最近20年の実証研究

最近20年間の社会主義研究は、全般的な沈滞のなかでも地道に進められてきた。この時期に刊行された単行本と各大学の博士学位論文は以下の通りである。

- 반병률, 『성재 이동휘 일대기 [誠齋李東輝一代記]』, 범우사, 1998.
- 권희영, 『한인 사회주의운동 연구 [韓人社会主義運動研究]』, 국학자료원, 1999.
- 성대경 엮음, 『한국현대사와 사회주의 [韓国現代史と社会主義]』, 역사비평사, 2000.
- 임경석, 『한국 사회주의의 기원 [韓国社会主義の起源]』, 역사비평사, 2003.
- 이현주, 『한국 사회주의세력의 형성 [韓国社会主義勢力の形成]: 1919-1923』, 일조각, 2003.
- 박철하, 『1920년대 사회주의사상단체 연구 [1920년대社会主義思想団体研究]』, 숭실대 박사학위논문, 2003.
- 강호출, 『코민테른 ‘조선문제결정서’를 통해 본 조선공산당 운동 [코민테른「朝鮮問題決定所」を通してみる朝鮮共産黨運動(1925-1928)]』, 고려대 박사학위논문, 2004.
- 역사학연구소 편, 『역사속의 미래 사회주의 [歴史のなかの未来、社会主義]』, 현장에서미래를, 2004.
- 임경석, 『박헌영의 생애 (연보 1900-1956) [朴憲永の生涯 (年譜1900-1956)]』, 여강출판사, 2003; 『이정 박헌영 일대기 [而丁朴憲永一代記]』, 역사비평사, 2004.
- 전상숙, 『일제시기 한국사회주의지식인 연구 [日

- 帝時期韓国社会主義知識人研究]』, 지식산업사, 2004.
- 전명혁, 『1920년대 한국사회주의운동 연구 [1920년대韓国社会主義運動研究]』, 선인, 2006.
- 박종린, 『일제하 사회주의 사상의 수용에 관한 연구 [日帝下社会主義思想の受容に関する研究]』, 연세대 박사학위논문, 2007.
- 임경석, 『잊을수 없는 혁명가들에 대한 기록 [忘れがたい革命家についての記録]』, 역사비평사, 2008.
- 윤상원, 『러시아지역 한인의 항일무장투쟁 연구 [ロシア地域韓人の抗日武装闘争研究]』, 고려대 박사학위논문, 2010.
- 임경석, 『모스크바 밀사: 조선공산당의 코민테른 가입 외교 [モスクワ密使: 朝鮮共産黨のコミンテルン加入外交]』 푸른역사, 2012.

この時期の研究動向のなかでも注目されるのは、新進の研究者の参入が目に見えて減ったことである。社会主義研究に関する論文や著作は依然として少なくない数が出版されている。しかし仔細にみると、その研究に従事する研究者は1980-1990年代に研究活動をはじめた人々であることがわかる。新進の研究者で著述を発表した者は数えるほどしかない。こうした現象は各大学院でより明確に見いだせる。修士・博士課程に在学中の大学院生たちのなかで、社会主義研究に臨む学生たちは非常に少ない。

もうひとつ注目すべきことは、反共主義歴史学が復活したことである。権熙英の著述にはそうした特徴が明確にあらわれている。東欧とソ連社会主義の没落は彼に大きな打撃を与えた。彼は韓国社会主義の存在価値について、深刻な疑問を抱くようになった⁽¹³⁾。冷戦期の全体主義言説へと戻っていった。日帝下の社会主義者たちはソ連の指導に依拠して革命を追求し、他律の形態の心理に浸っていたと理解した。権は社会主義が朝鮮の社会を一

段階退行させたという結論に到達した⁽¹⁴⁾。

右傾化現象は社会主義研究のみならず、歴史研究の全般にわたりあらわれている。朝鮮史の他の主題についても同一の現象を見いだせる。義兵運動研究はその一例だ。反日義兵運動において指導的な役割を果たした社会勢力は、はじめは儒生であったが、1907年以降、徐々に平民へと移っていったというのが通説であった。これに対して呉瑛燮は保守的な修正解釈を打ち出した。あらゆる義兵指導者たちは、高宗皇帝の密旨に呼应し、儒教的忠君意識に鼓吹されて武装蜂起を断行したという主張である⁽¹⁵⁾。ほかにもある。安秉直と弟子たちは、多方面にわたり植民地近代化論を拡張している。彼らは経済史研究の領域は言うまでもなく、教育の分野にまで進出した。例えば朱益鐘は日帝植民地下の中等教育の拡充が、朝鮮総督府の教育政策の所産であると理解した。1935-43年に中等教育学校の数は2倍に増え、入学生数は2倍以上増加したが、これを可能にした要因は総督府の政策変化であったというのだ。その変化がなければ中等学校の拡充は不可能であったというのが、彼の主張である⁽¹⁶⁾。

この時期の社会主義研究の環境は、史料の面でも大きな変化を被った。従来は日本の官憲史料が主たる史料であった。一部、押収された運動当事者の資料が日本語訳され保存された場合もあったが珍しいケースだった。研究は、ほぼ全的に弾圧者の視線から作成された文書に依拠するほかなかった。ところがこの時期には史料の地平が大幅に拡張された。ロシア資料に立脚した研究成果が出現した。ロシア資料とは、ロシア国立社会政治史文書保管所(РГАСПИИ)に所蔵されたコミンテルン資料をいう。ソ連共産党中央文書保管所の時代には、閲覧することなど考えも及ばなかったこれらの資料がソ連解体以後に対外的に公開され始めた。1990年代の前半に李均永や林京錫らが個人的に探索をはじめたこれらの資料は、1990年

代末からは国史編纂委員会の手を借りて体系的に収集された。

ロシア資料は朝鮮社会主義運動研究の地平を拡張した。運動当事者の視線により生産された膨大な資料群が、新たに研究者たちの前に出現したのである。いまや日本の官憲資料とコミンテルン資料をクロスチェックできるようになった。社会主義運動の当事者たちが残した記録と、彼らを弾圧した官憲の記録を比較できるようになったのである。一面的であった社会主義の歴史像が立体的でダイナミックな様相を帯びるようになった。新たな資料群の発掘は歴史研究を進展させた。林京錫、カン・ホチュル、崔ギュジン、全明赫、尹サンウォンの研究成果は、コミンテルン資料と日本の官憲資料の比較検討のうでで生み出されたものである。

5. 模索

社会主義運動史をどのように形象化すべきか。社会主義研究の新たな出発のためには、この問いに向き合わねばならないと考える。「形象化」と書いた。なぜ文学と芸術のいう形象化という用語に頼って歴史学の革新を企てるのか。

歴史認識は過去の歴史の模倣だからである。アリストテレスによれば、芸術のさまざまなジャンルは客観世界の「模倣」である。この指摘を敷衍するならば、人間のあらゆる認識は本質的には客観世界に対する模倣の所産であるといえる。歴史学もそうだ。ここでいう模倣とはギリシャ語のミメーシス(mimesis)の翻訳語である。ローマ人たちはこの言葉をimitatioというラテン語へと移した。今日の英語imitationはこのラテン語に由来する言葉だ。英語のimitationという言葉には、「ニセ、模造品」という意味が強いが、ミメーシスという言葉にはそうした含意はまったくない。そのため英語翻訳者のなかではミメーシスという

言葉をそのまま用いたり、representationへと移し替える者もある。朝鮮語の語感では「再現」や「形象化」がその本来の意味に近いと考える⁽¹⁷⁾。

形象化についての関心は、論文書法のマンネリズムに対する省察と連関している。今日において論文は研究者が生産するもっとも主たる形態の叙述のジャンルである。問題提起がなければならず、既存の学説史に照らして必ず新しい要素を込めなければならない。ぎゅうぎゅうに詰め込まれた形式的な整合性に合わせて書かねばならない。歴史学の学術誌に載らねばならず、そのため同業者たちの掲載可否の審査を通過しなければならない。さらには就職と昇進のため一年に一定の本数を必ず生産しなければならない。それが論文である。

歴史の論文には長所がある。飾らない論理的な書法に適合的であるため、歴史学的な命題と論旨を確立するのに極めて有用である。だが、すべての論文において論理が整合するよう書かれているわけではない。形式こそ備えてはいるが、論文らしい実質を満たせていない文章は少なくない。しかしより大きな問題は、研究者たちが論文以外の書法のジャンルについて考えようとすらしなないことである。

論文は、歴史を書く方法のさまざまなジャンルの一つであるとみなしたい。客観世界を形象化する方法が、どうしてそれだけでありえようか。叙述の伝統を復元し、歴史の荒波のなかで人間が経験した内面の意識を再現し、精巧なプロットを通して興味と感動へと導く書法のジャンルが、歴史叙述のなかから分化して出てこなければならないと考える。

運動史の形象化は二つの叙事様式を通して達成される。悲劇的叙事と喜劇的叙事がそれである。悲劇的叙事は革命運動に献身した人々を形象化するのに有用である。悲劇的叙事の主人公は倫理的で善良な者だからである。アリストテレスによれ

ば、悲劇と喜劇の主人公は異なる。喜劇は「実際以下の悪人」を描写するのに対し、悲劇が描写するのは「実際以上の善人」である。

運動史の登場人物たちは悲劇的叙事の主人公と似たところがある。彼らは普遍的な人類愛のために自らの身を捧げることを決心したが、失敗と挫折のなかで苦痛を受ける者たちである。亡命地で、獄中で、山の中で、道端で、あらゆる苦勞をいとわずに自らの利益ではなく公共の善のために努力するが、追求した理想は惨憺たる失敗と挫折に終わる。よって運動史は悲劇の歴史として描かねばならない。

悲劇は人々の情緒や心理を高揚させる有用な叙事様式である。悲劇とはただ悲しい話を指すわけではない。悲劇的叙事の原型を提示したギリシャ悲劇に注目しよう。ギリシャ悲劇の特性は、神が与えた厳格な客観的秩序と人間の自由意志のあいだの闘争を描くところにある。この闘争は結局、神の勝利に帰結する。神の秩序は厳然たるものであるがゆえに、それに立ち向かう人間の自由意志はへし折られてしまう。失敗と挫折の原因は神の秩序のなかにあるのではなく、つねに人間の内部にあるからである。

しかし単に失敗と挫折を示すことが悲劇の本質を構成するわけではない。悲劇は観衆に憐憫と恐れ感情を提供し、観衆は共同の体験を通して集団的にそれら二つの感情を排泄する。ひとりでは到底耐えられない巨大な憐憫と恐れ感情を共同で排泄することにより、人々はアイデンティティーの統合を経験する。そこで留まってはならない。悲劇的叙事のクライマックスは、人間が惨憺たる失敗のなかでも解放に向かう自由意志を放棄しないことを形象化することにある。まさにそうした人間像を形象化することが悲劇的叙事の核心である。

人間を文明へと導く火をもたらした理由で、カフカス山脈にそびえる岩山に縛られて苦しみを味

わったプロメテウスは、悲劇的叙事の典型的な主人公である。彼は13世代の歴史が過ぎた後には、ゼウスであっても破滅を免れず、そのとき自らは解放されると確信した。だからこそあらゆる苦痛を耐え抜いてゼウスとの妥協を断固として拒絶した。プロメテウスを形象化することは、1991年以降の時期を生きる研究者の歴史叙述のひとつの目標に挙げられねばならないと考える。神が与えた運命を拒絶し反逆する人間の自由意志と熱情、その拒絶と苦悩を再現しようとする。まさにそれが運動史研究の新しい出発点が求める座標のうちのひとつである。

喜劇的叙事の本質は倫理にある。喜劇の主人公たちは道徳的には平均以下の群像である。公共の利益よりも自身の狭隘な利益を優先視する人々、正義を捨て去る人々、外勢に追従し民族的利益を毀損する人々がそうだ。どんな国でも抑圧者と特権階級の歴史は、喜劇的叙事の立派な素材となる。

プロットに関心を注いでいる。プロットとは歴史のなかの人物たちの行為と事件を因果的に配置することであろう。効果的な形象化のために注意を向けねばならない問題であると考えられる。

糸口の提示という類型のプロットを活用していくつかの文章を書いた。「父の手紙」は、別れてから15年ぶりに父・朴憲永がモスクワに暮らす娘・ビビアンナに送った手紙を素材にした⁽¹⁸⁾。革命の荒波のなかで散り散りに別れた家族たちの、それぞれ異なる生を形象化する際には、その手紙に込められた肉声がよい端緒となった。手紙の一節を引用したのち、いかなる背景があるがゆえにそのような表現が出る他なかったかを詳しく説明した。このプロットを活用してより長編の歴史を執筆しようと考えている。

回顧録を主要な素材とする場合にも、糸口のプロットは有用であった。朝鮮南部の農村に隠遁したまま老齢を迎えた社会主義者・金鏗洙は、いく

つかの録音テープを残した。そこには社会主義がはじめて受容された時期から6.25戦争にいたるまでのあいだ、ある個人が経た体験が録音されていた。回顧談のなかにはプライドや憤怒、悲しみが表出する箇所がある。数十年の歳月が流れたにもかかわらず、老人の胸と脳裏に消し去りがたい強烈な感情が残っているのである。それを端緒として、いかなる歴史的背景と事件があったために、その老人の感情がそれほどまでに激しく動いたかを説明した⁽¹⁹⁾。

二重のプロットも歴史叙述に活用した。二つの相異なる叙事を独立的に提示しながら、両者が密接に関係していることを示そうとした。「二人の密使」がこのプロットを適用した文である⁽²⁰⁾。1924年の鄭在達・李載馥事件に関する文章である。逮捕された二人についての詳細な警察尋問記録、検察、裁判記録が残っている。それだけではない。コミンテルン資料のなかには二人がウラジオストクの朝鮮共産党創立大会準備委員会に送った秘密報告書が保管されていた。二重のプロットを歴史叙述に適用できたのは、性格が異なる二種類の史料群があったからである。

一人称プロットとでもいおうか。三人称の全知的視点を脱し、他の視点から歴史を叙述できないだろうか。主語を「私」にする歴史叙述が可能かを多角的に模索した。だが結果は否定的だった。歴史のなかの人物を「私」と想定する場合には、私的・個人的な内面世界を表現できる史料の裏付けがなければならない。手紙と日記が分厚く残っている場合ならばいざしらず、そうでなければ不可能だと判断した。ただし、ひとつだけ例外がある。歴史学者自身を「私」と想定する場合である。私が研究対象である尹滋瑛という人物とどのように知り合ったかを、いくつかの場面に分けて文章を書いた。時間的順序には従わなかった。よく知られている事件から始め、未知の新発掘事件へと進む順序を踏んだ。「出会い」というコンセ

プトを使用した。私と尹滋瑛の四回にわたる出会いについて叙述した。

形象化のための多様な苦悶、これが社会主義研究の新たな出発のための私なりの入り口だ。悲劇的叙事、プロットの活用などを実証研究に導入してきた。より多角的な模索が求められる。歴史のなかの人物たちの内面意識をいかに表現するか、歴史のなかの行為と事件をいかに分厚く描写するか、近代史の長期変動のなかで社会主義をいかに巨視的に展望するか、などの問題について熟考が必要であると考え。

註

- (1) 김준엽·김창순, 앞의 책 1, 159쪽
- (2) 로버트 스칼라피노, 이정식 지음, 한홍구 옮김, 앞의 책 (1), 33쪽
- (3) 서대숙 지음, 현대사연구회 옮김, 앞의 책, 7쪽
- (4) 김준엽, 김창순, 앞의 책 1, 421쪽
- (5) 임경석, 「일본인의 조선 연구 - 사상검사 이토 노리오 (伊藤憲郎) 의 사회주의 연구를 중심으로 [日本人の朝鮮研究 思想検事伊藤憲郎の社会主義研究を中心に] 」, 『한국사학사학보』 29, 한국사학사학회, 2014, 229-258쪽
- (6) この共同研究発表会では五篇の論文が発表された。
「세계대공황기 민족해방운동연구의 의의와 과제 [世界大恐慌期民族解放運動研究の意義と課題] 」 (이준식), 「세계대공황기 사회주의. 민족주의세력의 정세인식 [世界大恐慌期社会主義、民族主義勢力の情勢認識] 」 (임경석), 「세계대공황기 사회주의진영의 전술 전환과 신간회 해소문제 [世界大恐慌期社会主義陣營の戦術轉換と新幹会解消問題] 」 (이애숙), 「세계대공황기 노동력의 성격과 과업투쟁 [世界大恐慌期労働力の性格と罷業闘争] 」 (김영근), 「세계대공황기 혁명

- 적농민조합운동의 계급. 계층적성격 [世界大恐慌期革命的労働組合運動の階級、階層的性格] 」 (이준식)
- (7) 五篇の論文が掲載された。
「공산주의 운동사 연구의 의의와 과제 [共産主義運動史研究の意義と課題] 」 (임경석), 「서울과 공산주의 그룹의 형성 [ソウル派共産主義グループの形成] 」 (임경석), 「북풍파 공산주의 그룹의 형성 [北風派共産主義グループの形成] 」 (박철하), 「1922~1924년 국내의 민족통일전선운동 [1922~1924年、国内の民族統一戦線運動] 」 (이애숙), 「재노령 고려공산당창립대표회준비위원회 (오르그뷰로) 연구 [在露領高麗共産党創立代表会準備委員會 (オルグ・ビューロー) 研究] 」 (강호출)
- (8) 이수걸, 『1930년대 조선의 농민조합운동 연구: 특히 ‘혁명적’ 농민조합운동을 중심으로 [1930年代朝鮮의 農民組合運動研究: 特に「革命的」農民組合運動を中心に] 』, 고려대 박사학위논문, 1990; 이준식, 『일제침략기 농민운동의 이념과 조직: 함경남도 평지대의 경우 [日帝侵略期農民運動の理念と組織: 咸鏡南道平地帯の場合] 』, 연세대 박사학위논문, 1991; 임경석, 『고려공산당 연구 [高麗共産党研究] 』, 성균관대 박사학위논문, 1994; 전상숙, 『식민지시대 국내 좌파 지식인에 관한 연구: 사회주의 당조직활동을 중심으로 [植民地時代国内左派知識人に関する研究: 社会主義黨組織活動を中心に] 』, 이화여대 박사학위논문, 1997. 박철하, 강호출, 박종린의 학위논문은 제4절 본문에 소개함.
- (9) 최규진, 『코민테른 6 차대회와 조선공산주의자들의 정치사상 연구 [コミンテルン第六回大会と朝鮮共産主義者の政治思想] 』, 성균관대 박사학위논문, 1996; 전명혁, 『1920년대 국내 사회주의운동 연구: 서울파를 중심으로

- 로 [1920年代国内社会主義運動研究：ソウル派を中心に]』, 성균관대 박사학위논문, 1998 ; 안태정, 『조선노동조합전국평의회 연구 [朝鮮労働組合全国評議會研究]』, 성균관대 박사학위논문, 2000
- (10) 한홍구, 이재화 편, 『한국민족해방운동사자료 총서 [韓國民族解放運動史資料叢書]』 (1-5), 京沅문화사, 1990 ; 신주백 편, 『일제하신문사설연재자료집 [日帝下新聞社說連載資料集]』 1-12권, 영진문화사, 1991 ; 김경일 편, 『한국민족해방운동사자료집 [韓國民族解放運動史資料集] (전10권)』 영진문화사, 1993
- (11) 황석영, 『오래된 정원 (하)』 창작과비평사, 2000, 268쪽 [黃皙暎、青柳優子訳『懐かしの庭〈下〉』岩波書店、2002年]
- (12) 洪茶丘 (1244-1291) は三代にわたりモンゴル帝国の高麗支配に協力した高麗人官僚である。モンゴル支配に抵抗する三別抄の反乱者たちにより王に推戴された承化侯は、洪の刃にかかり命を失った。彼は強大な外勢に追従する没主体の隷属的發展論者を表象するのに不足のない人物である。かつての乙巳五賊と今日の親米をする者たちは、彼の分身であり後裔である。
- (13) 권희영, 「러시아, 러시아사회주의 그리고 한국 [ロシア、ロシア社会主義、そして韓国]」, 앞의 책, 497쪽
- (14) 권희영, 「근대화의 심성 [近代化の心性]」, 앞의 책, 562쪽
- (15) 오영섭, 『고종 황제와 한말 의병 [高宗皇帝と韓末義兵]』, 선인, 2007
- (16) 주익중, 「1930년대 중엽이후 조선인 중등학교의 확충 [1930年代中葉以降朝鮮人中等学校の拡充]」, 『경제사학』 24, 1998, 119쪽
- (17) 이상섭, 『아리스토텔레스의 ‘시학’ 연구 [아리스토텔레스의 『詩学』 연구]』 문학과지성사, 2002, 97쪽
- (18) 임경석, 「아버지의 편지 - 일제 식민지와 6.25 전쟁이 한 가족의 운명에 준 상처 [父の手紙：日帝植民地と6.25戦争がある家族の運命に与えた傷]」, 『개벽』 제46호, 대원출판, 2000
- (19) 임경석, 「김철수와 조선공산당 제2회 대회 [金鏝洙と朝鮮共産黨第二回大会]」, 『역사비평』 60, 역사문제연구소, 2002 ; 임경석, 「김철수와 그 경쟁자들 [金鏝洙とその競争者たち]」, 『역사비평』 61, 역사문제연구소, 2002 ; 임경석, 「김철수, 상해 국민대표회의의 조직자 [金鏝洙、上海国民代表大會の組織者]」, 성대경 엮음, 『시대를 앞서 간 사람들 [時代に先んじた人々]』, 도서출판선인, 2014
- (20) 임경석, 「두 밀사: 경성지방법원 정재달, 이재복 사건기록과 그 실제 [二人の密使：京城地方法院鄭在達李載馥事件記録とその實際]」, 『역사비평』 109, 역사문제연구소, 2014

討論者 井上學（『海峡』同人）のコメント

先ほどの林（イム）先生の講演の後の質問で「転向」の問題が出されました。権力の強圧による転向ということももちろんあるわけですが、先生がご指摘されたのは内面からの転向ですね。

日本でもご承知のように天皇制に対する転向、これは権力の強制に加えて、内面的に天皇制を支持するという形での転向が行われております。それを内面的なレベルで解明しようとしている一人に伊藤晃さんという研究者がおります。代表的な著作としては、『天皇制と社会主義』などがあります。このことを申し上げたのは、おそらく後ほどの質問及び討論で、韓国における社会的な転向現象についての質問や議論がかなり出るのではないかと思われるからです。ただこれからお聞きしたいのは、そういう社会的現象についてではなくて、その現象に立ち向かう研究の状況についてです。

それではレジュメに沿って、ほぼこの通りに読んでいきたいと思います。

韓国の研究状況が、林先生ご自身の体験をもとにして極めて率直にリアルに語られ、社会の各分野に広がった「自発的転向」現象に対抗して、新しい研究を進め、社会主義運動史を形象化するために模索している熱意がとてもよく伝わりました。

日本でも、社会運動の数々の貴重な体験、実践が忘れられ、埋められ、歪められています。そういった中で、我々は、振り返られることなく歴史の底に沈められてしまってきた歴史の原石を発掘

し、歴史を叙述しなくてはならないと思っています。そういう点で、林先生のお話に大変共感いたしました。

提起された問題は大変大きな問題で、お話にあった各時期の歴史研究の諸潮流について、全体的にコメントすることはできません。しかしながら、最初に紹介いただいたようなテーマに取り組んできた私自身の体験をもとにして、この機会にいろいろ教えていただこうと思ひ、かなり身勝手な幾つかの質問をしてコメントに代えさせていただきます。

南北分断時代の歴史研究には、社会的条件や資料面のみならず方法論的にも独自の困難さがあると思いますが、以下のような問題は、歴史段階的に一貫して追求されるべき根本的問題ではないかと考え、自分の研究体験での説明を加えながら質問をしたいと思ひます。

これから1、2というふうに申し上げますけれども、最初に自身の研究で体験したことを述べて、質問内容に触れるという書き方をしております。それはあくまでこういう趣旨で質問するんですということのためにそのような形にしています。自分自身の体験を述べている部分についての説明が不足するかもわかりませんが、趣旨はそういうことだご理解いただければありがたいと思っております。

1. どの時期の、どんな社会運動が研究対象になっているのか

現在日本では「戦後民主主義」が問われております。戦後民主主義の主な特質に、被害者体験が強い平和思想があります。日本帝国主義が敗北した変革期に、この特質がどのように形成されたか。その矛盾過程が「戦後日本共産党と朝鮮問題」に集中的に現れていると考えて研究をしています。

近代日本人民の根本矛盾の一つは、＜国内被支配階級が対外的には抑圧民族の一員＞である矛盾です。この矛盾は日本の社会運動において、＜反戦と反帝＞＜日本革命と朝鮮民族解放＞の矛盾として現出しますけれども、この歴史を、全社会的諸矛盾との関連で捉え、根源的に批判することが課題だと考えています。

そこで質問です。韓国では南北統一、社会の民主化が社会運動における現代的課題だろうと思いますが、その課題に対応する運動史研究としては、どの時期の、どんな運動が典型的のテーマになっているのでしょうか。

2. 朝鮮社会主義運動史を国内国外、南北を一体的に、解放前後を統一的に認識する問題

【李載裕(イ・ジェユ)逮捕報道と普天堡(ポチョンポ)戦闘】

李載裕は、1934年4月14日、西大門(ソデモン)警察署を脱走。これは2回目の脱走です。京城帝大教授、三宅鹿之助の官舎床下の穴に40日間潜伏した。5月21日に三宅が自宅で検挙されたが、李載裕は見つからず脱出した。それから実に2年8カ月間、全朝鮮の警察の血眼の追撃をかわして果敢に活動を続けた。

1936年12月25日、ついに逮捕した朝鮮総督府官憲は「執拗凶悪の朝鮮共産党遂に潰滅す 元凶李載裕遂に捕縛」と凱歌をあげた。新聞各紙が号外を発行した。

『毎日申報』特別号を目にした金日成(キム・

イルソン)抗日遊撃隊が、6月4日、咸鏡道(ハムギョンド)甲山郡(カプサンゲン)恵山鎮(ヘサンチン)の普天堡を攻撃した。「朝鮮民族は生きている」烽火を敢然と上げたのである(普天堡は現在両江道リャンガンドです)。

『李載裕研究』の著者、金晁一(キム・ギョニル)氏は、『金日成回顧録 世紀とともに6』を引きながら、「国内社会主義運動と満洲での抗日武装闘争の運動は、民族解放という共同の大義に収斂されえたという事実」があったと、記述しています。

もう一つの体験例を申し上げます。

【李寿甲(イ・スガブ)先生訪問】

2005年秋、韓国解放60周年記念KBSテレビ番組「8・15の記憶」で初めて南朝鮮労働党員であったことを明らかれたにされた李寿甲先生(1925-2013)を訪問しました。

李寿甲先生は、再建朝鮮共産党の指導者、金三龍(キム・サムリョン)、李鉉相(イ・ヒョンサン)、李観述(イ・グァンスル)らを生き生きと語っていただきました。

李載裕は、1944年10月、清州保護教導所で獄死。金三龍は、1950年3月、韓国警察に検挙され死刑。李観述は精版社偽造紙幣事件(1946年5月)で米軍政庁に検挙、1950年6月大田(テジョン)刑務所で虐殺。李鉉相は、1953年9月智異山(チリサン)で戦死しております。

こういう人々のお話を直接、李寿甲先生から伺って、私は解放前と解放後の歴史が実感をもってわかったような気がしました。

以上のような問題ですが、朝鮮社会主義運動史を国内国外・南北を一体的に、解放前後を統一的に認識する歴史研究がどのように深められてきているのでしょうか。

3. 民族と階級、戦略的認識、運動中核の組織的

形成一で述べたような歴史像にかかわる 理論的問題について一

【朝鮮民族解放運動における「民族と階級」の問題】

この問題は、解放後在日朝鮮人運動史でも一つの主要な論点になっております。金斗鎔(キム・ドゥヨン)論などの中でそうだと思います。

この問題の日本人の認識については、雑誌『赤旗(せっき)』1923年4月号のアンケートの諸意見が、朝鮮民族独立運動を無産階級解放運動と対立させて否定的に論じたことが指摘されてきました。あまり知られていないと思いますので紹介させていただきますが、『政治批判』という雑誌の第11号、1928年1月に掲載された三田薫の「朝鮮問題と日本無産階級(一)」という論文があります。この三田論文は、「すべての問題は『資本主義と闘ふ』といふところに還元される事を以て解決されたかの如く見なす、一見過激に見える見解を唯公式として投げ与へられたに過ぎず、朝鮮問題に関して大衆を奮ひ立たしめる為の実践的な指針となり得なかつた」と、『赤旗』を批判しました。日本プロレタリアート自身の自己批判は注目されるべきだと思います。なお、三田薫の本名はわかっておりません。また論文(二)は掲載されていないようです。

戦後日本共産党と朝鮮問題をやっておりますが、日本革命と朝鮮解放の関係が根本的矛盾といますか、複雑な関係にあることがわかります。

それで質問になるわけですが、民族独立、統一と社会主義変革の問題が、韓国社会主義運動史研究ではどのように論じられているのか関心があります。

【戦略的認識の問題(米帝と国内支配階級)】

また例を出させていただきますが、野坂参三

は、延安から帰国する途次、極秘裏にモスクワに入り、その後ピョンヤン、プサン経由で帰国しました。ピョンヤン滞在は1945年12月中旬から31日で、その間21日に金日成と会っています。その面会で金日成は、「南朝鮮において人民委員会を強制解散して軍政を実施し、人民の民主主義的進出を苛酷に弾圧している米国に対して絶対に幻想を持ってはならない」と言及したと言われています。それは『金日成全集』第2巻、「野坂参三一行との談話」の中に書いております。ただこの点の野坂の証言資料はありません。

野坂が帰国する直前、1945年12月に日本共産党第4回大会が開催されておりますが、そこに朝鮮共産党代表が参加しました。団長は姜文錫(カン・ムンソク)でありました。第4回大会直後に創刊された日本共産党機関誌『前衛』には、連続して「ハンクン・ツラリム」の名の論稿が掲載されております。この「ハンクン・ツラリム」は姜文錫のペンネームです。

『前衛』創刊号には、「朝鮮共産党の行動綱領」も掲載されています。これは「米国英国等の連合国の現在における歴史的進歩性を曖昧に取り扱ったことに対する自己批判に基いて新しく決定した行動綱領」であり、「注目に値する」という前書きを付記して掲載されています。この時点で早くも日本帝国主義敗北後の東アジアでの革命の戦略的問題がたち現れていたと見る事ができます。

いわゆる、「反ファッショ連合軍は解放軍」という認識の転換過程が日本と朝鮮では時間的ズレが見られますが、韓国社会主義運動史においてこのような解放後における戦略的問題についての研究はあるのでしょうか。

【運動中核の組織的形成】

李載裕は、1930年代の運動の中で、国際権威の認定争いをする小グループの分立に対して、国内

に運動の基盤をおいて、下から自主的に運動を組織する、いわゆる「トロイカ方式」の党再建運動を対置しました。

韓国の1970年代に、李載裕の英雄的革命運動が30年代左翼運動の神話として密かに語り継がれていたということですが、そこには現在の韓国における運動中核の組織的形成的問題意識があったのではないかと考えております。そのような問題意識による歴史研究はあるのでしょうか。

4. いくつかの点

①林先生は講演の最後に「人物の内面意識の表現」「歴史を分厚く描写する」ことを強調されました。解放前、解放後の社会主義運動体験者の証言、自叙伝などを集積する努力はどのように行われてきているのでしょうか。

日本では、1970-80年代に「運動史研究会」という組織によって、主に戦前期の証言等が全17巻、別巻1として継続刊行されています。日本の戦後約10年間については『日本共産党の80年史』など、50年史以降の党史ではいわば対象外、この対象外というのは二つの意味で申し上げるわけです。この時期の日本共産党朝鮮人党員の叙述、あるいは徳田書記長指導部の叙述がなされていないのですが、党外に出た人たちの証言記録が蓄積されていても、未公刊の資料が多い。これが今の状況です。もちろん、高史明(コ・サミョン)氏の作品とか、27年間の幽閉後帰国した伊藤律の証言など、重い証言があります。

②林先生が紹介された文献についてです。解放後の南朝鮮での社会運動を対象にした研究が少ないように感じたのですが、いかがでしょうか。もしそうだとすれば、どんな意味があるのでしょうか。

なお、安載成(アン・ジェソン)氏の『京城

(キョンソン)トロイカ』(吉澤文寿・迫田英文訳、同時代社、2006年)という本の日本語訳出版に少しかかわっていたので聞かせていただきたいのですが、同じく安載成氏の著作である朴憲永(パク・ホニョン)、李鉉相、李観述の評伝が先生のご紹介文献にはなかったように思われます。これらは評伝なので、紹介されていないのでしょうか。

③北朝鮮の研究、著作の韓国での研究状況はどのようでしょうか。日本では極めて少数の例ですけれども、たとえば、48年南北連席会議の歴史物語である『三千里の山河』が、日本語に翻訳・出版されております。

④三宅鹿之助、市川朝彦(京城帝大反帝同盟事件)、和田獻仁(朝鮮反帝同盟京城地方組織準備委員会)、磯谷季次(太平洋労働組合事件)等、日本社会運動史ではなおざりにされてきた在朝日本人社会運動家の活動についての研究はあるのでしょうか。

以上です。林京錫先生のご講演に対するコメントとしては、ピント外れな質問ばかりというふうには思わないでもないのですが、お許しいただいて、以上で私のコメントを終わりにしたいと思います。

報告者 林京錫から討論者への応答

いろいろな質問をしてくださいましたが、どれ一つとっても容易には答えられない大変大きな質問だと思います。

1. どの時期の、どんな社会運動が研究対象になっているのか

第一の問題からお答えします。韓国においては、民主化と統一というのが非常に重要な課題になっているわけですが、研究史においてはこれらのどのような時期、あるいはどのような対象が典型的な研究の対象として取り上げられているのでしょうか、というご質問だったと思います。

韓国の場合は日本とは違って、南北が分断されているというのが非常に大きな特徴だということを考えていただく必要があります。南と北はそれぞれ異なる理由によって社会主義運動研究が阻害されてきた歴史があります。皆様ご存知の通り、韓国においては社会主義の実現のために行動したり、これを社会化すること自体が犯罪行為として扱われてきました。国家保安法がそれを禁止しています。そのため、当然ながら社会主義の歴史に関する研究は、韓国では活性化しづらい状況があります。北朝鮮では理由は異なりますが同じような状況があります。北側では金日成の革命の歴史とは異なる社会主義の歴史が、宗派の歴史、分派の歴史として扱われています。しかし、遺憾ながら、金日成の革命活動自体は全体の社会主義運動の中では非常に小さい部分を占めるに過ぎません。そのために、社会主義の運動全体が忘

却の中に沈められてしまっている状況にあり、朝鮮半島では、南北ともに朝鮮の社会主義運動を研究するということが非常に難しい、珍しい現象になっています。このため当然ながら南でも北でも研究されていないことに焦点を当てて取り上げなければいけないと思います。

韓国における社会主義の起源は、ほとんどが三一革命、三一運動との関係があります。三一革命以降、民族解放運動において社会主義というビジョンが非常に重要な位置を占めるようになります。そのため年度でも言いますが、1919年から45年に至る時期の社会主義運動の研究というのが非常に重要です。私はその時期の運動がまずは研究されねばならないと思います。

二つめの質問のこれらの研究の中でどのような対象を扱うのかということですが、このような中では、党ではなくて、党とはまた異なる視角、存在から取り上げなければいけないと思います。この理由として、非常に簡単なことを一つ挙げることができます。朝鮮半島において朝鮮共産党が存在した時期というのは、3年程度しかありませんでした。このため、党を中心に歴史を観察してしまうと、全体像を捉えることはできません。さらに、実際に党が存在した時期であっても、党を中心とした紐帯は非常に小さかったと言えます。このため、構成員達をつなげた枠組みというか、アイデンティティというものは、党以外の別のつながりでした。これは、従来、分派とか派閥とか言われていたものなのですが、私はそれをまた違う用語、中立的な言葉で位置付けたいと思ってお

りまして、共産主義グループといった言葉を使って表現しています。この朝鮮では、様々な共産主義グループが出てきました。上海派、イルクーツク派、ML派、火曜派、北星会派、北風会派、まだまだあります。これらのグループの派閥内部の構成員たちの紐帯や一体感の方が党に対するそれよりもはるかに強かったですし、時間的にも非常に長い間続きました。これは分派闘争と呼ばれてきたわけですが、それを別の視角から捉える必要があると思います。共産主義者や社会主義者であれば岩のような硬い団結の元にプロレタリアートの前衛であらねばならないのに、なぜこのような現象が生じたのかということをご考察しなければいけないと思います。

三つめ、私たちが注目しなければいけない研究対象は統一戦線だと思います。特に朝鮮では、植民地からの解放、民族解放の理論として、社会主義の理論が形成されてきたというところがありますので、統一戦線が非常に重要な意味を持ちます。朝鮮史において、統一戦線として現れた団体、存在としては、大韓民国臨時政府、あるいは新幹会、光復会などがあります。祖国光復会の方は若干誇張されたところがあって、本来は局地的な統一戦線と呼ぶようなものだったと思います。それに対して臨時政府や新幹会は、より規模が大きく地域的な広がりもある統一戦線でした。その中でも特に大韓民国臨時政府は民族主義団体と理解されています。韓国の憲法にも明示されている存在で、いわば民族主義の独立運動と捉えられています。つまり、韓国における政治的な目的に合うように選択的に臨時政府の性格というものが語られているわけです。実際にこの臨時政府の最初の与党は韓人社会党という社会主義政党でしたし、その指導者は李東輝（イ・ドンフィ）という社会主義者でした。そういう意味では民族統一戦線の歴史に関する偏見のない、真実に基づいた歴史研究が必要だと思います。

2. 朝鮮社会主義運動史を国内国外、南北を一体的に、解放前後を統一的に認識する問題

このご質問は小さい二つの質問に分かれていますが、合わせてお答えしたいと思います。非常に難しい問題ですが、国内と国外、南北、そして解放前と後を統一的に捉える歴史研究というのがどのように進んでいるのかというご質問でした。

まず強調したいのは、ここでご指摘されているそれぞれの問題は非常に難しい問題だということです。国内と国外の運動は連結されておられません。特に1930年代以降は完全に断絶してしまいました。1920代までは秘密結社として朝鮮内で設立された朝鮮共産党は、満洲には満洲総局、日本には日本総局という組織を持っていました。そして、朝鮮内で朝鮮共産党検挙事件が起こると、だいたいほとんどの場合、一定の時間をあけて満洲総局検挙事件、日本総局検挙事件が起こることになります。しかし、1930年からは、一国一党原則が厳格に適用されるようになりました。満洲総局と日本総局は解体することを指示され、そこに所属していた朝鮮人の共産主義者たちは、中国共産党と日本共産党に所属することになりました。

これは一国一党の原則という理論のもとでなされたことですが、この現象を注意深く見なければいけないと思います。よく知られているように、一国一党の原則は1919年にコミンテルンが設立された時の規約にある言葉です。ヨーロッパの状況を背景に考えれば、容易に理解できる規約、原則だと思います。しかし、植民地、半植民地、従属国の地位に置かれた非西洋世界においては当てはまらないというか、適切ではないような原則だと思います。例えば、朝鮮革命は、朝鮮は当時植民地だったため、民族解放革命という性格を持ちます。国が外国勢力によって軍事的、政治的に支配・占領されている状況ですから、亡命地、つま

り朝鮮外における本拠地が必然的に求められる状況にありました。実際に1920年代には東京や北間島（きたかんと）、現在は中国延辺朝鮮族自治州の辺りになりますが、その辺りが社会主義運動の重要な本拠地でした。それに加えて、上海やウラジオストクも同様の役割を果たしました。しかし1930年代の一国一党原則は、それらの本拠地を成り立たせなくさせました。一国一党原則は、西洋のそれぞれが独立した列強である国同士の共産主義者の原則としては妥当なものだと思います。しかし植民地にそれを適応してはならなかったものののに適応されてしまいました。

例えば1940年代、朝鮮の国内で最後の社会主義の秘密結社として、京城コムグループが出来上がります。このグループはコミンテルンとつながるために、その秘密結社で使節団を送ろうということを試みます。これは成功しませんでした。その理由は、国境地帯を警備する日本警察の有能さということがあるとは思いますが、もう一つは、当時は海外との連絡のラインがほとんどすべて断絶してしまっていたということだったと思います。そのため、1930年代以降の社会主義運動は国内と海外を分けて研究するのが適切だと思います。

これは、解放後の歴史についても同様だと思います。解放後における断絶の起源は1950年の朝鮮戦争の始まりだと思います。1950年の朝鮮戦争以前と以後を比べると、そこでは非常に大きな運動の断絶があるということがわかります。朝鮮戦争が内戦であったという事実を想起してください。もちろん国際戦争であるという側面もあります。内戦、つまり同じ言葉や同胞との間で紐帯を感じていた人々の間での戦争で、500万人にのぼる人が死亡、失踪、負傷しました。そしてそこに休戦ラインが引かれることになりました。この結果、それ以後、南側では社会主義に対する非常に強い敵対感が出てきます。これは国家によって強調されたところもありますが、人々の社会主義に対す

る恐怖感があったことも事実です。このため朝鮮戦争以後は、様々な社会運動が社会主義という名前では展開されないという特徴が現れました。南において解放後の民主化運動は、様々な輝かしい成果を生み出しました。4.19革命、そして1980年の「ソウルの春」と光州抗争、1987年の6月抗争、いずれも輝かしい成果を生み出しました。この4月5月6月を導いた民主化の担い手は自らを社会主義と表現しませんでした。ここでは社会主義ではなくて民主主義という自己規定が押し出されて、特殊な民主主義ということが議論されました。そこでの社会運動の論争においても、市民的民族主義か、民族的民主主義か、民衆の民主主義かということが争点になりました。戦争の以前と以後でこれほどの大きな断絶があります。だからこそ、井上先生が提起された朝鮮の国内国外と南北を統一的に扱うということは非常に難しい課題なのです。また、非常に鍛え抜かれた方法というものが需要だと思います。このため私はこれらの課題は社会主義史という視角では十分には取り扱えないのではないか、むしろ革命史という枠組みなどの方が長期的、あるいは巨視的な観点で朝鮮の歴史を捉えられるのではないかと思います。

朝鮮半島の近現代史においては日本とは異なる非常に大きい特徴があります。それは革命の時期とそれを超えて支配が安定する時期が8回にわたって交代するという特徴があります。日本とは全く異なります。数百万の民衆たちが政治権力に対して主として暴力で立ち向かってこれを革命によって変えようとするような動きが8回起こり、さらにこれに対して支配体制が反撃して支配を安定する試みも8回ありました。その8回の革命と支配体制の形成の歴史について因果関係を研究するということがアプローチすれば、井上先生の問題提起された長期的な視角での歴史把握というのはできるかもしれません。注6の「世界大恐慌期、民族解放研究の意義と課題」「世界大恐慌

期、社会主義、民族主義勢力の情勢認識」等々の論文が列挙されています。ここに挙げた論文では、革命とそれに対する支配体制の反撃と安定、それぞれの因果関係についての分析が含まれています。ただここでは、問題提起にとどまっていて、それ以上、研究を深められていません。

3. 民族と階級、戦略的認識、運動中核の組織的形成 —2で述べたような歴史像にかかわる理論的問題について—

【朝鮮民族解放運動における「民族と階級」の問題】

三番目の質問は非常に難しい問題に満ちています。まず一つ目、「民族の民主化と統一の両者間の連関の問題をどう論じるべきか」というご質問ですが、これについては連関させて論じるというのは非常に難しいと思いますし、研究者は連関させて論じることを控えたほうがいいのではないかと思います。運動の戦略戦術について考えるのは政治団体、運動団体の人々が主としてなすべきことであって、学術に従事する者たちは、これらをより深いレベル、その真相を分析するというところに従事すべきじゃないかと思います。迂回的にこれらの主題について扱ったほうがいいという言い方をしてもいいかもしれません。

その理由を説明しますと、まずは韓国社会の事情が非常に特殊で困難であるということが一つあります。韓国においては、1945年以前を扱うことと、以後を扱うことにおいて本質的な違いがあります。韓国には報勲処という、勲章を与える役所がありますけれども、そこで独立有功者を審議する際の重要な一つの基準があります。1945年以前の社会主義運動は独立運動と認定されます。しかし、45年以降の社会主義運動は反国家行為とみなされます。対象は全く同じであるにもかかわらず、政治権力によってこのように全く異なる扱い

を受けているという事実が重要だと思います。国家機関だけではありません。社会的な心性のレベルでもそのようなことがあります。

ちょっと私個人のお話をさせていただきたいと思います。私の研究リストには「社会主義」という言葉の入った研究テーマ、論文がたくさんあります。就職をするときにいろいろなところに願書を出しました。本当にたくさん出しました。二度ほどあったことですが、面接で「社会主義の研究をしているみたいですが、もしかしたら内面的にも社会主義に信念が一致される場所はありませんか」というふうに聞かれました。韓国の憲法では、自分の内面の意思は尊重されるはずですが、少なくとも2カ所からそういう質問を受けたわけなんですね。そういうこともあって私の就職は遅れました。それゆえにこの後の問題にも関連してくるんですけども、解放以後の研究が遅れたところにはそういった理由があります。学内でのゼミや研究者同士の間で非公開に話すことはできるんですが、それを公開的に話すことはちょっと躊躇してしまいます。

4. いくつかの点

①解放前、解放後の社会主義運動体験者の証言、自叙伝などを集積する努力はどのように行われてきているのか

日本の「運動史研究会」などで、いろんな証言や資料が集積されているとおっしゃっていたんですけども羨ましく思います。韓国ではそういった自叙伝ですとか、回顧録の類のものは先ほどの発表で出た金鏗洙の話だけです。私も個人的に、証言とかそういった活動にかかわったことはあるんですけども、本当に労力が必要な作業になります。個人でやるというよりは団体の力が必要だと思います。その点、日本の運動史研究会でやったように韓国でもそういった活動を見習う必

要がある。と言いますのは、朝鮮戦争というものがああります。統一になればそういった作業が大々的に起こると思います。

②紹介した文献について

解放後の研究成果をあげることよりは、まずはその研究成果よりも資料を蓄積することが大事だというふうに認識しています。例えば『朴憲永全集』がいい例になります。そういったテーマによって阻害されることなく幅広く展開されることを望んでおります。安載成先生の『京城トロイカ』はそういった面で注目すべき作品だというふうに考えます。この『京城トロイカ』は歴史書というよりは文学的な性格を持っていると思います。一番大きな問題は資料に対する責任ですけれども、歴史家の立場からちょっと外れているように思います。それはもともと安載成先生が素晴らしい小説家であることなんですね。

③在朝日本人社会運動家の活動についての研究

磯谷先生については、韓国語で自叙伝が発刊されております。三宅については、全明赫先生の研究論文があります。韓国の民族解放運動に参加した日本人に対する研究なんですけれども、少し困難があります。と言うのは、個人や家族の記録に接近することがなかなか難しいんですね。韓国の人々はこういった方々からたくさんの恩恵を受けているんですけれども、そういった点で考えるとちょっと申し訳ない気持ちがあります。今日皆さんからいい指摘をたくさんいただきましたので、これからこういった日本人の活動についても少し研究できればと考えております。